

## 五島列島の潜伏キリシタン墓の研究 (旧木の口墓所調査その2)\*

加藤久雄\*\*、野村俊之\*\*\*、白濱聖子\*\*\*、藤本新之介\*\*

### Study of the tomb of hidden Christians in the Goto Island Vol.2

Hisao KATO\*\*, Toshiyuki NOMURA\*\*\*, Satoko SHIRAHAMA\*\*\* and Shinnosuke FUJIMOTO\*\*

#### 1. はじめに

本稿は長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所が主体となって、平成24年2月から平成25年12月にかけて実施した、五島市平蔵町字中木の口に所在する「旧木の口墓所」調査の続報である。調査に至る経緯・位置と環境及び24年12月までの調査内容については、「長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要12巻1号」掲載の『五島列島の潜伏キリシタン墓の研究 (旧木の口墓所)』を参照されたい。

#### 2. 調査の経緯

平成24年3月、本学加藤研究室において加藤・野村間で協議を持ち、本年度の調査方針を決定した。

主となる2次調査は、夏季休暇期間中の同8月25日から9月8日まで、日本島嶼学会発表をはさみ、三井楽教会資料館所蔵の信仰具調査・関連する墓所等の調査と並行して実施した。調査参加者は加藤・野村・白濱・藤本の他、別府大学文学部文化財学科松菌菜穂である。今時調査では、可能な限りの個別実測の実施と全石組墓の写真撮影、配置及び遺構の再評価を主眼としたが天候に恵まれず、実測調査は数基のみに終わった。

11月8日には近世陶磁器実測の技法と解釈の着目点について、熊本市文化交流局熊本城調査研究センター美濃口雅朗文化財保護主管の指導を頂いた。

またこれと前後して、6月7日から9日、11月22日に追加調査ならびに五島列島内の関連する墓所等の踏査を実施した。

本年度の大きな出来事として、KTN製作によるFNSドキュメンタリー大賞ノミネート作品『祈りの海』内において、旧木の口墓所を取材場所として加藤が五島における潜伏キリシタンの歴史解説をおこなったこと、直後に長崎新聞が本墓所調査成果の紙面報道をおこなったこと、また本

学が主幹となって開催した日本島嶼学会福江大会において、加藤・野村(2014)によって「潜伏キリシタン墓・旧木の口墓所」の学会発表をおこなった他、京都平安女学院大学国際観光学部学生の夏季キャンプにおいて本墓所の見学がなされ、100名を越える参加者のあった奥浦地区主催の歴史ウォークで野村が現地説明をおこなうなど、周知と活用が進捗したことがあげられる。

これに対応して、現地保護対策として、管理者木口榮氏らの手によって、墓所区画の臨時的な外柵及び、侵入禁止の表示板が設置された。

#### 3. 2次調査の概要

既報告の通り、現地は伐開から時間も経ち、植物の繁茂による劣化防止のため、木口氏によって日常雑草の除去等の管理が行われている。このため墓所は良好な状況を保っているが、雨水による洗い出しは進んでおり、1次調査では発見できなかった遺物20点を新たに検出した。前回と同様、検出地点の記録と写真撮影をおこない、管理者による墓地清掃のため、遺物の取り上げをおこなった。この内19点は近世から近代の陶磁器片である。この中に1点、No.24墓近辺で採取した風化の進んだ大型貝類片が含まれており、観察の結果かなり大型のマガキであることが判明した。前回調査には鳥類骨1点が含まれており、自然死によるものか供献されたものであるかの判断がつかなかったが、今回の貝殻片は他に同様の貝類が見当たらず、原型を想定するならば15cm以上の特に大きなものであることから、供献されたものと考えてよかろう。時間経過による有機物の腐敗を考慮すれば食物として捧げられた供物というよりも、水入れとしての用途を考えている。

同様に、石組墓も洗い出しが進むと共に埋没もみられ、事前調査及び一次調査で改葬痕を想定した地表のくぼみは、周辺の平坦部とほとんど判別がつかない状況であった。

\* Received January 5, 2015

\*\* 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

\*\*\* 長崎ウエスレヤン大学 地域総合研究所客員研究員

\*\*\*\* 長崎ウエスレヤン大学 地域総合研究所客員研究員、石造遺産調査会

本墓所は現在も過去の人々が埋葬されている「生きた」墓を対象としているためあくまで現況の調査であり、発掘を行わず植栽の除去と簡易な清掃に留めることを基本方針としている。このため、どうしても法量の計測や各石組墓の弁別に限界があった。しかし、石組については法下と石組内部に表土の堆積は見られるものの概して洗い出しが進み、倒木や切り株の腐朽による除去も容易になり、より詳細な観察ができる状況となっている。

その結果、新たに仮No.67から71までの5基（うち1基は1次調査で不明遺構として石組墓と認識できなかったもの）の石組墓を認定できた。同様に各石組墓の詳細を観察することも容易になった。また、この1年間で潜伏キリシタンに限らない九州島内の石組墓調査例の収集や実見を進めたこと、調査者らの目が養われたこともあり、認定や形状の弁別も深化した。

これらの成果は稿を改めて報告するとともに、悉皆実測とそれに伴う詳細観察実施後分析、検討をおこないたい。

以上の状況から今回の報告は、紙幅の制限上前回掲載し得なかった全石組墓の写真掲載をおこなう。

掲載する写真は、一部の例外を除きデジタル一眼レフカメラを使用し、長軸・短軸2方向から撮影を行ったものの中から、より特徴を把握しやすいもの1カットを選択した。旧木の口墓所理解の一助になれば幸いである。

#### 4. おわりに

旧木の口墓所の物質文化的・考古学的調査は未だ道半ばである。今回新たに認定したもの、今後の調査で見いだされる可能性があるものを含めておよそ80基に上る悉皆実測は、トレースを含めて現在までに2割弱程度の進捗である。また遺物に関しては美濃口氏の協力による前回報告した鑑定、別府大学考古学研究室の助力を得て洗浄・注記・接合の1次整理まで完了しているが、実測に関してはほぼ未着手である。特に陶磁器の染付の実測・トレースはかなりの時間を要することが見込まれる。これらを含めて25年度中には、現状で可能な限りの調査を終え、報告をおこなう予定である。

経年変化や自然災害の可能性もそうであるが、本墓所の認知が進む状況下において、現在管理者である木口氏を中心に住民の方々が引き受けてお

られる保護・管理にも限界があるであろう。まして、保存・活用の為には行政を含め広く理解と協力を訴えていかなければなるまい。このためにも早急な調査報告とその公開をおこなわなければならない。

しかし同時に、形態分類や法量の検討による個々の石組墓の位置付けと編年、供献遺物の散布状況からその組成と時系列による変化を分析するとともに、離島における陶磁器の流通状況把握を進め、より学術的な位置付けをおこなうこともわれわれ研究者の責務である。別稿『石組墓の成立と変化についての予察』で述べたような位置付けは、類例の研究や、同時期の檀家制度で営まれた福江島内の他の墓所、近代以降のカトリック墓地の踏査確認とそれらとの比較検討もおこなわなければならないだろう。

このように課題は山積しているが、それぞれを着実に進めるとともに、それらの総合的な視点をもって今後の調査研究を進める決意を以って本報告のまとめとしたい。

#### 5. 参考文献

- 加藤久雄・野村俊之・白濱聖子・藤本新之介（2014）『五島列島の潜伏キリシタン墓の研究（旧木の口墓所調査）』長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所 長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要12巻1号（53-70）
- 野村俊之・加藤久雄・白濱聖子・藤本新之介（2014）『潜伏キリシタン墓の造墓原理』長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所 長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要12巻1号（71-80）
- 野村俊之・加藤久雄（2014）『潜伏キリシタン墓・木の口墓所の概要』2014年次日本島嶼学会要旨集（96-110）

#### 謝辞

本調査は長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所2014B3の補助を得ておこなわれたものである。

木口榮（墓所管理者）・美濃口雅朗（熊本市文化交流局文化振興課熊本城調査研究センター）・田中裕介（別府大学文学部教授）・別府大学文化財大学院文学研究科文化財学専攻博士前期課程崎野祐太郎・園田涼太・千原和己・山下祐雨・文学部史学・文化財学科 井大樹・江口寛基・松園菜穂・中原彰久・高木慎太郎・塩見恭平・時枝杏名・福島りきや・吉岡たくやの諸学生。永治克行・吉田和彦（杵築市教育委員会）・大石久貴

(KTN)・五島市の皆様、本学関係者・学生諸氏  
(順不同・敬称略)

また日本島嶼学会会員の皆様には発表にあたって貴重なご意見を賜った。

本調査と報告にあたり、皆様のご助力とご指導を賜った。記して感謝申し上げたい。

PLT.1



No.1 北から



No.2 南から



No.3 西から



No.4 南から



No.5 南から



No.6 南から



No.7 南から



No.8 西から

PLT.2



No.9 西から



No.10 西から



No.11 西から



No.12 西から



No.13 南から



No.14 西から



No.15 西から



No.16 西から

PLT.3



No.17 西から



No.18 西から



No.19 西から



No.20 南から



No.21 南から



No.22 南から



No.23 西から



No.24 西から

PLT.4



No.25 西から



No.26 南から



No.27 西から



No.28 西から



No.29 西から



No.30 東から



No.31 南から



No.32 西から

PLT.5



No.3 3 東から



No.3 4 東から



No.3 5 南から



No.3 6 西から



No.3 7 南から



No.3 8 南から



No.3 9 西から



No. 4 0 西から



PLT.6



No.4 1 南から



No.4 2 西から



No.4 3 西から



No.4 4 南から



No.4 5 南から



No.4 6 南から



No.4 7 西から



No.4 8 西から

PLT.7



No.49 南から



No.50 南から



No.51 南から



No.52 東から



No.53 南から



No.54 南から



No.55 南から



No.56 南から

PLT.8



No.5 7 東から



No.5 8 西から



No.5 9 北から



No.6 0 西から



No.6 1 東から



No.6 2 南から



No.6 3 東から



No.6 4 北から

PLT.9



No.6 5 西から



No.6 6 南から



仮No.6 7 南から



仮No.6 8 南から



仮No.6 9 南から



仮No.7 0 南から



a:礫群 南から



b:礫群 東から

PLT.10



e:小児墓か 南から



f:石組墓か 西から



g:改葬痕か 南から



h:改葬痕か 西から



i:仮No.7 1 南から



j:改葬痕か 西から



k:改葬痕か 南から



y:改葬痕か 西から

